

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 10 日現在

機関番号：33910

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2014

課題番号：23730633

研究課題名(和文) 児童・生徒の主体的な競争を促進する教師の指導態度に関する研究

研究課題名(英文) A study on the leadership of teachers to promote the proactive competition of children and students

研究代表者

太田 伸幸 (OTA, Nobuyuki)

中部大学・現代教育学部・准教授

研究者番号：40367628

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：子どもが競争を行う際、教師の競争に対する態度が子どもの行動に影響を与えられ、教師を競争心によって3類型(消極的競争者、手段型競争者、目標型競争者)に分類し、教師の競争に対する指導態度について検討した。勝敗にこだわるのではなく、その過程における動機づけや成長について競争を肯定的にとらえる態度を存在した。また、指導内容は自身の持つ競争に対する態度を基準に決定されることも明らかとなった。類型ごとの検討では、消極型競争者で競争が必要と明言する者はおらず、手段型競争者、目標型競争者では、ただ競争させるのではなく、適切な競争が行えるように配慮する姿勢があることが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：Teacher's competitiveness is considered to affect the child's competitive behavior. Therefore, 3 types (passive competitors, means type competitor, and target type competitor) by the competitiveness of the teacher are classified into, was examined leadership toward competition of teachers. Rather than stick to the victory or defeat, was there an attitude of affirmative capture the competition for motivation and growth in the process. In addition, guidance content also became clear that that is determined on the basis of the attitude toward competition with the own. In the study of each category, negative type competitor in person Orazu that stated the need competition, means type competitor, in the target-type competitor, only rather than to competition, is considerate attitude to allow appropriate competition it became clear that it is.

研究分野：教育心理学

キーワード：競争 競争心 教師の競争に対する指導態度 自発的な競争

## 1. 研究開始当初の背景

教育場面では、協同学習や協調学習などの児童・生徒どうしの協力を重視した教育カリキュラムは多く開発されているが、競争は回避される傾向にある。それは、競争が否定的な対人感情をもたらすという知見 (e.g. Sheriff, 1966) があるからであろう。しかし、必ずしも競争が否定的な対人感情をもたらすとは限らない。例えば、榎本 (1999) は中学・高校・大学生を対象にした調査において、友人に対する感情として「ライバル意識」の存在を指摘し、友人という親密な対人関係であっても相手に対する競争心が存在することを明らかにしている。さらに、競争的な対人関係であるライバル関係は友人間で形成されやすいことも明らかとなっており (太田, 2009a), 友人間で競争が生じて、必ずしも否定的な対人感情を生起させるわけではない。

では、なぜこのような相反する知見が提示されるのであろうか。これは従来の競争に対する否定的な知見は「競争をさせる」ことの効果についての知見であることに依るものと考えられる。競争的な対人関係であっても、ライバル関係のように「主体的に競争する」関係では、肯定的な対人認知が形成されており (太田, 2004a, 2006a), これは「主体的に競争する」ことで関係形成をより促進する可能性を示唆している。

現実に競争を求められる状況は多々存在するが、これらの場面で「主体的に」競争が行えるようにするためには、競争に対する態度や信念の形成を促す働きかけは重要であると考えられる。例えば、競争をさせられることで否定的な対人感情を生起させるという知見に対し、室山・堀野 (1991) は敗者に対しての配慮を示すことや、競争の対等性を維持できるような条件を導入することで、否定的な対人感情は生起しないことを明らかにしている。これを教育場面にあてはめると、敗者への配慮や競争の対等性を維持する役割は教師にあるといえよう。すなわち、児童・生徒の競争に対する態度や信念の形成に対して、教師の指導態度・指導行動が与える影響が大きいと考えられる。

また、競争場面に対する態度として、太田 (2005a) は、競争心の低い者に対して競争的でない状況での競争を導入することは、かえって課題への動機づけを低下させることを明らかにしている。これは、どのような場面で競争を導入するか、あるいは相手の競争心の程度によって競争を導入するかしないかを決定しないと、効果的な競争は行えないことを示している。これを教育場面に当てはめると、教師がどのような場面で競争を取り入れるかということになるため、やはり教師の役割が重要であると考えられる。

## 2. 研究の目的

教育場面において児童・生徒に主体的な競

争を促す態度の育成には、教師の競争に対する指導態度・指導行動のあり方を明らかにすることが必要であるといえる。したがって、本研究では、教師の競争に対する指導態度の構造に注目した検討を行う。

ただし、教師の指導態度については、佐藤 (1993) がクラス全体への指導態度と個人の指導態度の認知の組み合わせによって生徒のモラルに交互作用が生じることを指摘している。これは、教師の指導態度のみを明らかにするだけでは不十分であることを意味する。太田 (2005a) の指摘のように、競争の導入の仕方により対象の動機づけに交互作用が生じることは、佐藤の指摘を指示する証左であると考えられる。

したがって、児童・生徒の競争心・主体的な競争の状況と教員の指導態度の関連について分析し、児童・生徒の特徴にあわせた指導態度・指導行動を明らかにすることが必要である。本研究では、教師と児童・生徒の相互作用の分析を通して、主体的な競争を促す教師の働きかけのあり方について明らかにすることを目的とする。

## 3. 研究の方法

### (1) 調査 1

調査対象 小学校・中学校教員 各 100 名、計 200 名を対象とした。平均年齢は 45.0 歳 (SD=8.87), 平均教員歴は 20.8 年 (SD=9.42) であった。

調査手続き 専門の業者に依頼し Web 調査にて実施した。モニターとして登録している者に対して業者から調査協力依頼のメールが届き、調査実施に同意した者が調査用の Web サイトにアクセスして回答した。ただし、本調査に入る前にスクリーニング項目が設けてあり、1) 小学校または中学校の教員、2) 勤務形態が教諭または常勤講師、に該当する者のみが本調査のサイトに誘導され、調査対象となった。

### 調査内容

1) 子どもどうしが授業中に競争する場面と授業時間以外 (部活動、休み時間、行事等) で競争する場면을記述させた上で、それぞれの場面における指導内容とその理由の自由記述を求めた。

2) 競争に対する指導態度について、自発的に競争すること、および子どもたちに競争させることに分けて自由記述を求めた。

3) 多面的競争心: 太田 (2010) で作成された多面的競争心尺度 (21 項目) を使用した。

### (2) 調査 2

調査対象 小学校教員 430 名・中学校教員 336 名、計 767 名を対象とした。平均年齢は 45.72 歳 (SD=9.05), 平均教員歴は 22.21 年 (SD=9.97) であった。

調査手続き 調査 1 と同様、専門の業者に依頼し Web 調査にて実施した。モニターとして登録している者に対して業者から調査協力依頼のメールが届き、調査実施に同意した

者が調査用の Web サイトにアクセスして回答した。ただし、本調査に入る前にスクリーニング項目が設けてあり、1) 小学校または中学校の教員、2) 勤務形態が教諭または常勤講師、に該当する者のみが本調査のサイトに誘導され、調査対象となった。

#### 調査内容

##### 1) 競争に対する指導態度 (40 項目)

子どもに競争をさせるときの考え方について、調査 1 の自由記述の内容を基に尺度を構成し、使用した。

##### 2) 子どもが自発的に競争することに対する態度 (20 項目)

子どもが自発的に競争することに対する考え方・態度について、調査 1 の自由記述を基に尺度を構成し、使用した。

##### 3) 多面的競争心 (21 項目)

太田 (2010) で作成された多面的競争心尺度を使用した。

##### 4) 肯定的/否定的ライバル観尺度 (25 項目)

ライバルという存在に対する態度について、太田 (2006) で作成された肯定的/否定的ライバル観尺度を使用した。

#### 4. 研究成果

多面的競争心尺度について、太田 (2010) に従って下位尺度得点を算出し、クラスタ分析 (Ward 法) を用いて 3 群 (手段型競争者、目標型競争者、消極的競争者) に分類した。

自発的に競争すること、および競争させることに関する自由記述を TRUSTIA/R.2 を用いて分析した。それぞれ 10 群に分類し、特になしを除いた 9 群について、競争心の分類ごとに集計した (Table1 参照)。子どもが競争すること、競争させることのどちらについても、競争の必要性や競争の結果に対するとらえ方の記述が多く見られた。現実社会での競争の存在を意識し、競争によって動機づけや成長を促すことに関する記述が多いが、結果を重視することに対しては否定的な態度を

Table1 競争をさせることに対する考え方の自由記述の分類

分類	記述例	手段型競争者	目標型競争者	消極的競争者	合計
やる気	やる気や向上心を伸ばすよい機会ととらえる	10	1	1	12
ルール	ルールを守ってけがのないようにする	2	1	1	4
結果	勝ち負けだけで終わらせない	33	28	5	66
競争の必要性	社会に出れば競争があるのは当然である	22	10	7	39
相互性	お互いを高めあう競争は必要	7	2	0	9
競争のとらえ方	競争をすることで培われる忍耐や発想力がある	32	8	7	47
時	時と場合によっていいと思う	2	1	1	4
意図的	そんなら意図的にさせていない	3	1	1	5
場面	競争の場面があった方が、活動にメリハリがつく	4	3	1	8

示していた。すなわち、勝敗にこだわるのではなく、その過程における動機づけや成長について競争を肯定的にとらえる態度が認められた。

次に授業場面における競争の内容を 5 種類、その場面における指導内容について 9 種類に分類し、競争心の類型ごとに集計した (Table2)。どの類型においても課題やゲームなどの優劣が分かりやすい事柄を競争場面としてあげているが、指導内容には類型により違いが認められた。手段型競争者は「対人関係維持」が他の 2 類型よりも割合が高く、「勝敗以外の目標」が低かった。これは、過程を重視する手段型競争者は結果を意識することによる影響に配慮した指導を行っており、結果を重視する「目標型競争者」「消極型競争者」は勝敗以外にも注目させる指導を行っていることを意味すると考えられる。すなわち自身の持つ競争に対する態度を基準に指導内容が決定されているととらえることができる。

Table2 競争の内容とそれに対する指導内容

	全体	手段型競争者	目標型競争者	消極型競争者
競争の内容				
課題	109	56	39	14
意見	17	11	4	2
競技・ゲーム	51	35	12	4
日常生活	14	8	3	3
なし	9	4	4	1
指導内容				
とくにしない	20	6	11	3
意見	8	4	4	0
勝敗以外の目標	41	19	16	6
課題への取り組み	39	25	12	2
励まし	38	26	9	3
勝敗に注目した指導	17	10	4	3
個別対応	10	6	0	3
対人関係維持	25	18	3	4
その他	2	2	0	0

そして、競争に対する指導方針・態度 12 種類に分類し、競争心の類型ごとに集計した (Table3)。競争の効果に関する言及において、競争を行うことによる動機づけや相互成長に関する記述が多かったため別項目として分類した。また、競争に対する直接的な指導ではなく、学級の環境づくりに関する記述も多く、すべての分類で最も多くの教師が記述していた。そして、競争の必要性に関する記述のうち、消極的競争者が必要と明言した教師はいなかった。

手段型競争者、目標型競争者の教師は競争に対する直接的な指導や競争の効果に関する記述が多いが、競争に伴う負の感情に対する配慮に関する記述が見られた。すなわち、た

だ競争をさせるのではなく、適切な競争が行えるように配慮する姿勢がうかがえる。

Table3 競争に対する指導方針・態度

	全体	手段型 競争者	目標型 競争者	消極型 競争者
競争の過程を重視	9	6	2	1
競争に対する直接の指導	14	9	5	0
手段としての競争	6	5	1	0
勝敗を意識した指導	5	1	2	2
競争の効果	14	9	5	0
競争による動機づけ・相互成長	33	23	9	1
現実にある競争を意識	10	5	3	2
学級環境づくり	45	25	11	9
競争は時には必要	19	10	4	5
競争は必要	23	18	5	0
競争は不要	12	4	4	4
無し	10	2	8	0

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

太田伸幸 2013 ライバルの対人関係次元上の位置づけに関する研究 中部大学現代教育学部紀要, 第5号, pp.29-38.  
(査読無)

太田伸幸 2012 ライバル認知の生起過程に関する研究 - 半構造化面接を用いた事例的検討 - 中部大学現代教育学部紀要, 第4号, pp.23-31.(査読無)

[学会発表](計8件)

太田伸幸 2014.11.7 教師の競争に対する指導態度に関する研究(3) 日本教育心理学会第56回総会・神戸国際会議場(兵庫県神戸市)

太田伸幸 2014.7.26 大学生の被ライバル視に関する研究(2) 日本社会心理学会第55回大会・北海道大学(北海道札幌市)

太田伸幸 2013.11.2 被ライバル視に伴う相手への認知に関する研究 日本社会心理学会第54回大会・沖縄国際大学(沖縄県宜野湾市)

太田伸幸 2013.8.17 教師の競争に対する指導態度に関する研究(2) 日本教育心理学会第55回総会・法政大学(東京都千代田区)

太田伸幸 2012.11.24 教師の競争に対する指導態度に関する研究 日本教育心

理学会第54回総会・琉球大学(沖縄県中頭郡西原町)

太田伸幸 2012.11.18 大学生の被ライバル視に関する研究 日本社会心理学会第53回大会・つくば国際会議場(茨城県つくば市)

太田伸幸 2011.9.18 ライバルの存在が個人の意識や行動にもたらす影響の国際比較 日本社会心理学会第52回大会・名古屋大学(愛知県名古屋市)

太田伸幸 2011.7.24 友人に対するライバル心が目標志向性に与える影響(2) 日本教育心理学会第53回総会・北海道立道民活動センター かでる2・7(北海道札幌市)

#### 6. 研究組織

(1)研究代表者

太田 伸幸 (OTA, Nobuyuki)  
中部大学・現代教育学部・准教授  
研究者番号: 40367628